
とある勇者一行の、騎士のつぶやき。

万尾

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある勇者一行の、騎士のつぶやき。

【Nコード】

N0517X

【作者名】

万尾

【あらすじ】

とある異世界の勇者一行の騎士のから見た、彼らの旅のお話。笑顔は素敵だけど能気な勇者に、もふもふな毛並みとオッドアイが魅力的なヤンこ聖女、色々な意味で身の危険を感じますマッドサイエンティストな魔術師に、剣の腕はそれなり女も酒も大好きな「私」。…え、本当にこの一行で魔王に挑むんですか？大丈夫だ、問題ない、じゃないですよ。今からでも遅くはありませんって。たぶんほのぼのファンタジー中編予定。

00・ジヨブチェンジが決定いたしました。

はじめまして、こんにちは。

私は、光の神チグルナンテと闇の神ユーフラネイアが創り給うた『世界』にある、4大大陸の内の一つ『火の大陸』の西南に位置する国の、近衛大隊付属第三小隊副小隊長を任命されておりました。第三小隊は王太子殿下の護衛を任務とし、私が副小隊長という身に余る光栄な役職を賜ったのも、侯爵家の四男として生まれ、適度に打ったり買ったり飲んだりしつつも、毎日鍛練してきた成果だと思われませんが。

…先日、私は『騎士』として、勇者一行の一員になることが決定いたしました。

…ええ。ええ、分かりますとも。皆さまは、「普通、勇者の一行といったら、王子様や、国一の〜とかだろう！」って思いますよね。

しかし、勇者、いえ、勇者の剣が原因と、言うべきでしょうか。

かの光の神が『魔王』を打ち倒す為に勇者に授けられた唯一無二のその剣は、剣と、そしてそれを振るう勇者の圧倒的神力から、大抵

の者はその圧力を受けてなお動くことは出来ないのです。

そして、その圧力を受けて動ける者は我が国では私以外いなかった、という訳なのです。大神官様曰く、現状の力だけではなく、ポテンシャルの問題もあるだとか、神力値の高さが云々だとか、色々と言われました。しかし、本音をぶちまけます！私の楽しい人生設計が狂うではないですか！

01・決意は揺るぎないものです。

最初は、何もなかった。

しかし、一瞬だったかもしれないし、
にも近かったかもしれない。

ある時に「無」は「光」と「闇」分かれた。

光と闇は最初に、

せ、

自分たちのすむ「家」をつくった。

光と闇は家をつくる上で不可欠のものとして、すべてを触れるための「土」を、すべてを癒すための「水」を、すべてを伝えるための「風」を、すべてを するための「火」をもって4大源素とした。

次に光と闇は、家の住民たちとして、自分たちを模した「全きもの」をつくった。

「全きもの」は強く心賢く、光と闇と良き秩序のもとで、ゆつくりと栄えていった。

光と闇は最後に、自分らと全きものたちがいる「家」の下に、自分たちの として「庭」と、そのの住民たち「欠け もの」をつくった。

「欠けしもの」たちは弱かったが心鋭く、
もとで、かれらは栄えていった。

光と闇と全きものたちは、めまぐるしい速度で変わっていく庭を
て喜んだ。

しかし、争いはゆっくりと、そして確実に「庭」を蝕んだ。
が庭を壊していったのだ。

すなわち、 「魔」である。

魔王は 打ち砕かれ、 光と
は 安心して家から庭を

欠けしものたちは長き時の間に、光と闇をそれれ「光の」、「闇の神」、「全き」の「を」神々、「欠けしもの」を「人・獣・霊・」と呼ぶようになり、前者が住 世界を「天の世界」、後者の住まう世界を「地の 界」とした。

そうして、今現在の世界の形となった。

現存する最古の「創世記」、第三版より抜粋文。
一部欠損あり。

* * *

「…あれを、頼む。だが、無茶はするな。無事に帰ってこい」
王太子殿下は、そうおっしゃいました。

この一言は、なんて重いのでしょうか。

勇者は、勇者であると同時に、この国の第二王子でもあられます。
お生まれになり、その右手に勇者の証である痣が発見されて以来、
勇者は王太子殿下以上に大事にされてきました。

方や世界を救った一人の勇者、方や地の世界の内、大小合わせ
せて五十余りある国々の一国の王太子殿下。
どちらかといえば、優先度は前者なのでしょう。

両陛下や周りの人々は、両殿下をそれこそ同じ分だけ愛されてい
たと思われます。

しかし、両殿下の肩書はあまりにも重きもの。
時には第二王子の方が優先される王太子殿下は軽んじられ、時には幼き身には有り余る力を持つ勇者は恐れられました。

小さき頃、王太子殿下が10歳の折に学友の一人として選ばれた時。

殿下は私に「僕で良いのか？」と聞いてこられました。

これは子供が尋ねてくる内容なのか。

私は愕然とするとともに、誓ったのです。

この方だけは裏切らないと。

そして、この方の笑顔を絶やさないためならば、私はなんでもしよつと。

兄弟としては、率直に申し上げて仲がよろしいとは言えないお二方でしょう。

しかし、この方々は、お互いを国になくてはならないものとして見ており、そこには不思議な信頼関係がみてとれます。

それは、この城に勤める者たちが感じられるほど強固なもの。

そして、あなたは今も勇者を想う。

あなたが望まれるのならば、私は必ず勇者を守りましょう。

あなたが望まれるのならば、たとえ見苦しくても、腕一本になる
うとも生にしがみつき、あなたのもとへ共にお帰りいたしましょう。

自然と頬が緩むのが分かる。

決して穏やかではない笑みだったでしょう、この想いはもっと醜
くも貪欲なものなのですから。

01・決意は揺るぎないものです。(後書き)

騎士は、王太子+4歳くらいのイメージです。

学友兼、ちよっとした相談役のような感じでの抜擢。

…というか、騎士が暴走してヤンデレっぽくなりました。

02. みんなたちは、行ってまいります。

月 日

せんせいにつきをつけてみるとよいつていわれました。

ぼくのじはどくそーてきたそうです。

につきをかいたら、せんせいにほめられたら、おてがみかけるかな。

月 日

きのう、ねる前に木にくつしたをつるして中におてがみをいれました。

あさなかをみると、おへんじがありました。

お花がいっぱいあって、おいしいものがたくさんあるところでした。しくらしているそうです。

ぼくに会えないのはさみしいけど、年をとるだけたくさんのおかしがたべられるようになるから、おかしをたくさんたべたいならまだ会えないってかいてありました。

ぼくもさみしいです。

おかしはがまんでできるとおもいます。

それよりも会いたいです。

月 日

兄様に剣で褒められた。

純粹に褒められるということは久しぶりで嬉しかった。

明後日は聖女様の命日なので、花の手配を頼んでおこうと思った。

月 日

僕は思い出した。

否、これは見た、理解したというべきなのかもしれない。

なぜ、僕が存在するのかを。なぜ、先の聖女様は自ら命を絶たれたのかを。

これが僕らの使命であり、存在理由なのであろう。

僕は「神」を怨む。

僕らの旅に、救いは無いのだろうか。

* * *

私が騎士として勇者と共に旅に出る事が決まったのは、そろそろ実家と相談しつつお見合いでもしようかと思っていた矢先でした。

気立てのよいお嫁さんをもらい、隊舎を出て王城の近くに一軒家を購入、温かい家庭を築いてゆき、一男一女に恵まれるのが理想的です。

息子には剣の鍛練をつけてやり、ゆくゆくは王太子殿下や、そのご子息のお役に立てるような立派な子に育ててほしいです、というか育てます。

娘は優しい子に育ってくれば十分だと思います。あ、一回「お義父さん、娘さんをください」「お前のような軟弱な奴には娘はやらん！」といったやり取りを試してみたいですね。

…などといった楽しい人生設計があつたのですが、見事崩れました。

いえ、まだ間に合いますとも！

さつさと魔王とやらを倒して、さつさと無事に帰還すれば良いだけのこと！

そういつた事を考えつつ、勇者のお部屋の前にたどり着くと、私は扉の前にいた近衛に取り次ぎを頼みました。

「やあ、丁度良かった」

勇者は部屋の中央にある二人掛けの長椅子に腰掛け、顔のみをこちらに向け笑顔で挨拶をしてくださいました。

膝に猫を乗せて。しかも、右手を噛まれています。

王太子殿下とご一緒の金髪碧眼に華やかな美貌、剣の稽古で鍛えられた肉体に濃紺の軍服が大変お似合いで、猫を膝に乗せて撫でていらつしやるそのお姿ですら絵画のようです。

その膝の上にいるのはふさふさの長い毛に覆われた黒猫。

左は緑、右は黄色の、まんまと大きなオッドアイの大変可愛らしいのですが、残念なことに黒猫のその背中の中毛は半ば逆立ち、唸

り声が聞こえてくることから、猫が怒っていることが伺えます。

「何か御用でもございましたか？」

とりあえず、勇者ご自身も特に気になさっている様子もなさそうですので、猫についてはスルーさせて頂きたいと思います。

しかし、愛らしい。

後で調理場から鶏のササミを貰ってこようかと思えます。

「彼女が到着したから、紹介しようと思って。」

「彼女、ですか？」

「うん、彼女。聖女だよ」

そう仰りつつ、勇者は膝の上にいた猫の両脇の下に手を入れ、目の前に掲げられました。

…部屋を一望して聖女らしき人物を探してみるも、私が入室した際に侍女は下がっていたため、勇者と私以外に、この部屋には他人はいません。

「当代は、猫なんだ」

かわいくてもこもこだし、僕ってラッキーなどと仰りながら、勇者は猫…もとい聖女をまた撫で始められました。あ、引っ掻かれた。

「そちらの猫が本当に聖女なのですか？」

半ば呆然としつつ私が問うと、勇者は深く頷かれました。

「うん、そうみたい。元々勇者・聖女・魔王にはそれぞれ性質があ

るからね。勇者は魔王を打ち砕く存在であり、剣を振るうため人間に転生するのに対し、聖女はその声をもって生き物の心を統べ、癒す存在。声を持たない水のもの以外の、ありとあらゆる生き物に生まれ変わる可能性があるんだ。記録によると馬とか鷹の聖女もいたらしいし、先代のように人間の聖女は稀なケースらしいよ」

そうだったのですか。先代は人間でしたし、教会では勇者や聖女といった固有名詞ばかりが謳われていたので、てっきり両方とも人間だとばかり思っていました。

私が思考を飛ばしている間に、聖女は勇者の膝から飛び降り、私の足元へやってきていたらしい。

『こんにちは、騎士どの』

子供のような、高い声が聞こえました。

「聖女のお声ですか？」

『はい。先程勇者が言ったように、私の特質は心に作用するもの。精神構造がそれなりにしっかりしているものの全くと、私は意思疎通ができます』

小首をかしげつつこちらを見上げて言う聖女の愛らしさは言語に絶します。

とりあえず、聖女の許可をいただき、肉球や毛並みを思う存分堪能させていただきました。

その後、出立は一週間後とか仰ってくださいました勇者のおかげで、各所への出立の挨拶や引き継ぎを行ったり、友人たちが連日宴会を開いてくれたり、未亡人である某女男爵や、長年仮面夫婦である某南方辺境伯夫人といったご婦人方との逢瀬を重ねたりなど、慌ただしい一週間を過ごしましたが。

男2人、猫1匹と中々寂しいものではありませんが。

楽しい人生設計の為！王太子殿下のため！

今、旅が始まります。

* * *

「ちなみに、なぜお会いした時聖女は怒ってらしたんですか？」

『勇者が！重いつて言ったんです！！』

「…勇者、このような愛らしいレディーにそれは失礼でしょう」

「いや、だって重いよ。7キロもあるんだよ」

『そういう種類なの！』

「いやいや侍女のお姉さんも他の同種の子より一回りは大きいって言うってたよ」

『大きいからちよつと重くなってるだけです！』

「やっぱり重いんだ」

『にゃ~~~~~!!!!』

02.みんなは、行ってまいります。(後書き)

聖女のイメージ猫はメインクーンです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0517x/>

とある勇者一行の、騎士のつぶやき。

2011年10月19日06時22分発行